

武藏野日曜集会

真理とは何ぞや

——ヨハネ伝第18章1～40節——

小池辰雄

1968年7月7日

神威 私はそれなり 父の我に賜いたる酒杯 イエスの捕縛 我が国は此の世よりのものならず 靈的世界秩序 靈界の王者 真理とは何ぞや 我は真理なり 真理の証人 虚偽の靈 聖靈の現象体

【ヨハネ18】

¹此等のことを言い終えて、イエス弟子たちと偕にケデロンの小川の彼方に出でたもう。彼処に園あり、イエス弟子等とともに入り給う。²ここは弟子たちと屡々あつまり給う処なれば、イエスを売るユダもこの処を知れり。³斯てユダは一組の兵隊と祭司長・パリサイ人等よりの下役どもとを受けて、炬火・燈火・武器を携えて此処にきたる。⁴イエス已に臨まんとする事をことごとく知り、進みいでて彼らに言いたもう『誰を尋ねるか』⁵答う『ナザレのイエスを』イエス言いたもう『我はそれなり』イエスを売るユダも彼らと共に立てり。⁶『我はそれなり』と言い給いし時、かれら後退して地に倒れたり。⁷爰に再び『たれを尋ねるか』と問い合わせば『ナザレのイエスを』と言う。⁸イエス答え給う『われは夫なりと既に告げたり、我を尋ねるならば此の人々の去るを容せ』⁹これさきに『なんじの我に賜いし者の中より我一人をも失わず』と言い給いし言の成就せん為なり。¹⁰シモン・ペテロ劍をもちたるが、之を抜き大祭司の僕を擊ちて、その右の耳を斬り落とす、僕の名はマルコスという。イエス、ペテロに言いたもう『剣を鞘に収めよ、¹¹父の我に賜いたる酒杯は、われ飲まさんや』

¹²爰にかの兵隊・千卒長・ユダヤ人の下役ども、イエスを捕え、縛りて先ずアンナスの許に曳き往く、¹³アンナスはその年の大祭司なるカヤバの¹⁴舅なり。カヤバはさきにユダヤ人に、一人、民のために死ぬるは益なる事を勧めし者なり。

¹⁵シモン・ペテロ及び他の一人の弟子、イエスに従う。この弟子は大祭司に知られたる者なれば、イエスと共に大祭司の庭に入りしが、¹⁶ペテロは門



の外に立てり。ここに大祭司に知られたる彼の弟子いでて、門を守る女に物言いて。ペテロを連れ入れしに、¹⁷ 門を守る婢女、ペテロに言う『なんじも彼の人の弟子の一人なるか』かれ言う『然らず』¹⁸ 時寒くして僕・下役ども炭火を熾し、その傍らに立ちて暖まり居りしに、ペテロも共に立ちて暖まいたり。

¹⁹ ここに大祭司、イエスにその弟子とその教につきて聞いたれば、²⁰ イエス答え給う『われ公然に世に語れり、凡てのユダヤ人の相集う会堂と宮にて常に教え、密には何をも語りし事なし。²¹ 何ゆえに我に問うか、我が語ることは聴きたる人々に見え。視よ、彼らは我が言いしことを知るなり』²² 斯く言い給うとき傍らに立つ下役の一人、手掌にてイエスを打ちて言う『かくも大祭司に答うるか』²³ イエス答え給う『わが語りし言、もし悪しくば、その悪しき故を証せよ。善くば何とて打つぞ』²⁴ 爰にアンナス、イエスを縛りたるままにて、大祭司カヤバの許に送れり。

²⁵ シモン・ペテロ立ちて暖まり居たるに、人々いう『なんじも彼が弟子の一人なるか』否みて言う『然らず』²⁶ 大祭司の僕の一人にて、ペテロに耳を斬り落とされし者の親族なるが言う『われ汝が園にて彼と偕なるを見しならずや』²⁷ ペテロまた否む折しも鶏鳴きぬ。

²⁸ 斯て人々イエスをカヤバの許より官邸にひきゆく、時は夜明なり。彼ら過越の食をなさんために、汚穢を受けじとて己²⁹らは官邸に入らず。²⁹ 爰にピラト彼らの前に出でゆきて言う『この人に対して如何なる訴訟をなすか』³⁰ 答えて言う『もし悪をなしたる者ならずば汝に付き³¹』³¹ ピラト言う『なんじら彼を引取り、おのが律法に循³² いて審け』³² ユダヤ人いう『我らに人を殺す權威なし』³³ これイエス己³⁴が如何なる死にて死ぬるかを示して言い給いし御言の成就せん為なり。

³³ 爰にピラトまた官邸に入り、イエスを呼び出して言う『なんじはユダヤ人の王なるか』³⁴ イエス答え給う『これは汝おのれより言うか、將わが事を人の汝に告げたるか』³⁵ ピラト言う『我はユダヤ人ならんや、汝の国人・祭司長ら汝を我に付³⁶ したり、汝なにを為ししそ』³⁶ イエス答え給う『わが国はこの世のものならず、若し我が國この世のものならば、我が僕ら我をユダヤ人に付さじと戦いしならん。然れど我が國は此の世よりのものならず』³⁷ 爰にピラト言う『されば汝は王なるか』³⁸ イエス答え給う『われの王たることは汝の言えるごとし。我は之がために生まれ、之がために世に来れり、即ち真理につきて証せん為なり。凡て真理に属する者は我が声をきく』³⁸ ピラト言う『真理とは何ぞ』



●神威

¹此等のことを『言い終えて、イエス弟子たちと偕にケデロンの小川の彼方に出でたもう

西から東南の方に向かつて行くわけです。

彼処に園あり、

ゲッセマネの園のことです。キリストの最後の祈りの所です。時々そこに行つて祈られたわけです。

イエス弟子等とともに入り給う。²ここは弟子たちと屢々あつまり給う処なれば、イエスを売るユダもこの処を知れり。³斯てユダは一組の兵隊と祭司長・パリサイ人等よりの下役どもとを受けて、ちゃんともう内通して、これがイエスを売ろうというわけです。

炬火・燈火・武器を携えて此処にきたる。

よく向こうの絵に書かれておりますが、

⁴イエス己に臨まんとする事をことごとく知り、進みいでて彼らに言いたもう『誰を尋ねるか』

非常にキリストは厳然としておられます。ヨハネ伝の伝えるこの記事が一番力強いですね。マタイ伝は26章、マルコ伝は14章、ルカ伝は22章ですけれども、こういうような書き方をしているのはヨハネ伝だけです。

⁵答う『ナザレのイエスを』イエス言いたもう『我はそれなり』

「エゴ エイミ」「アイ アム」「イッヒ ビン」

という言葉です。これがその「我はそれなり」という表現です。

「私だよ」

と。正にそうですね。

イエスを売るユダも彼らと共に立てり。⁶『我はそれなり』と言い給いし時、

かれら後退して地に倒れたり。

これは驚くべきことです。この「私である」とイエスが言われた時に、彼らはたじたじとして地に倒れてしまつた。まさにこれは神威である。神的な威厳です。私たちの日常生活の中にもサタンとの戦いがある。このユダはサタンの使いですから。相手はみなこのサタン的なやつ。マルチン・ルターが ヴォルムスに向かつて行つた時に、



「たとえ屋根の瓦ほどの悪魔がいても自分は行かざるをえない」と言つて、袖を引き止める者を正に、「サタンよ、退け！」であつて、ルターは敢然と向かつて行きました。

今は、このデーモニッシュなものが、サタン的なものが——ドイツ語で「デーモニッシュ」と言います。「ダイモニオン」というギリシア語から来てますけれども——実にはびこつています。青年諸君も本当に理性的に考えて、そして正しき事のために大いにやるのはいいですよ。けれども、どうも黒幕があつて、その黒幕に踊らされているような、いわゆる学生運動というやつ。それはみんなデーモニッシュなものに浮かされている。何も学生運動に限りません。いろいろな世の中の現象にはこのデーモニッシュなものが非常に動いています。百鬼昼行だな、夜行でなくて。百の鬼が昼間歩いている。この20世紀の文明は百鬼昼行的な現象が非常に多いわけです。

そのときにクリスチヤンが——相手は靈的なやつですからね、このデーモニッシュというの——相手の靈的なものに、こつちが觀念で勝ちっこない。これはどこまでももうひとつ上の靈的な、聖靈によるところの、靈的な人格になつていないと、これに勝てないわけです。

昨日は、大学のキリスト教研会の会合があつて、私に来てくれと言うから行きました。20人くらいいたかな。みんないろいろ自己紹介をして、最後に私に話をしてくれというので、私は生い立ちから、そもそものはじめから全部語った。一時間くらい語つてしまつた。それでやはり言つたんです。

「君たちは、いい加減なクリスチヤンになるならやめた方がいい。パウロさんが、『御靈を宿さざる者はキリスト者にあらず』とはつきり言つている。聖靈の人となれ」と。そこで私の体験談を証いたしました。まあちょっとみんな驚いて聴いていた。「先生の所はどこですか」なんて終わつてから聞いてきて、集会に来たいようなのが幾人かいたようです。そのうちに飛び込んで來るのがあるかも知れませんが。

●私はそれなり

「私はそれなり」

というこのキリストの

「私だぞ」

という言葉を皆さんよく肝に銘じてください。聖書のどんな凄い言葉もみんな私たちの現実としようとしてかかっている言葉です。それは空元氣で言つたつてダメです。いわゆる信仰的英雄氣取りで言つたつて、それはダメです。本当に内側にこの「私だよ」と、微笑んでも笑つても言えるような、そういう太い本当の力、底力というやつ。この底力を持つた、

「エゴ エイミ」「我なり」



という、「我はそれなり」という言葉。皆さんの中には何と書いてあるかい。

「私はそれである」

か。そして、相手がジリジリと下がつて地に倒れた。この聖靈の權威、聖靈の神威というものは、か弱い乙女であろうと、これは持てるんです。ジャンヌ・ダルクなんていうのはそういう乙女であつた。なにも戦争をすることがいいのではないけれども。どうぞ、この一言、

「我はそれなり」

と、はつきりと自分がキリストのものであり、聖靈の人であることを言つてください。「我はそれなり」は本当に証言です。「私だ」ということは証言である。存在をもつてするところの証言です。

本当は日曜の集会でも、司会者がここで証言しますけれども、

「その他に誰か証言する人はいませんか」

と言つたら、二、三人ここへつかつかとやつてくるようなわけでないと。時々やりましようかね。一週間で自分がとにかく、どんな小さい事でもいいです、主にあつて本当に生きた現実を証する。よく、感話会で、

「今日は当たるか、当たらないか」

と、そんなのはダメですよ。

「今日当たらなかつたらどうするか」

と（笑）。

「なぜ、先生は指さないか」

というようなことでしたら、もう私は自由にして、決して指しません。まだ指名してやる感話会は本ものではないから。夏の特別集会ではもう指名なしで行こうな。

そういうことです。これが「我はそれなり」ということ。

●父の我に賜いたる酒杯

⁷ 爰に再び『たれを尋ぬるか』と問い合わせ『ナザレのイエスを』と言う。

⁸ イエス答え給う『われは夫なりと既に告げたり、我を尋ぬるならば此の人々の去るを容せ』

自分が捕まることはキリストは知っていますから、自分と一緒にこの弟子たちが巻き添えをくらうことはかわいそうだ。今はその時ではないというので、

⁹ これさきに『なんじの我に賜いし者の中より我一人をも失わず』と言ひ給いし言の成就せん為なり。

これはその前のキリストの祈りの中にある。

17章12節、

¹² 我かれらと偕におる間、われに賜いたる汝の御名の中に彼らを守り、かつ



「成しせん為なり。」（ヨハネ17・12）
という言葉がありますが、未来完了式なことです。イスカリオテのユダが即ち「亡びの子」です。

¹⁰シモン・ペテロ剣をもちたるが、

ペテロというのはすぐ直言直行に出る男でね。

之を抜き大祭司の僕を撃ちて、その右の耳を斬り落とす、僕の名はマルコスという。イエス、ペテロに言いたもう『剣を鞘に収めよ、¹¹父の我に賜いたる酒杯は、われ飲まざらんや』

「お前はそんなことをして、私を守ろうとしたつて、それは無理なはなしだ。私は父の私にくださる酒盃を、十字架を受けるんだ。そんなことはよしなさい」と。これはマタイ伝のところにはちょっと出ている。マタイ伝26章51節、

「⁵¹視よ、イエスと偕にありし者のひとり、手をのべ剣を抜きて、「ひとり」というのはペテロのことです。

大祭司の僕をうちて、その耳を切り落とせり。⁵²ここにイエス彼に言い給う『なんじの剣をもとに收めよ、すべて剣をとる者は剣にて亡ぶるなり。

これは有名な言葉です。

「⁵³我わが父に請いて、十二軍に余る御使を今あたえらるること能わざと思うか。」

「私が今、天に叫べば、十二軍の天軍がやってきて、こんなローマの兵隊を蹴散らすことなんか何でもない。だけれども、それはしないんだ」

と。なんとまあ、キリストというひとは素晴らしい信に生きているか。信の世界はそのようないいことです。

「⁵⁴もし然せば、斯くあるべく録したる聖書はいかで成就すべき』」（マタイ26・51～54）

「私が罪の贖いの死をする、あのイザヤ書53章に預言者たちを通して預言されてい
る。また、旧約の祭司宗教において犠牲のことが行われ、大祭司と羔のことが書
いてある。これを自分が一身に今、成就しようということが、もしそうしたらと
んでもない、旧約聖書の全きが崩れてしまう。それを全くすることが崩れてしまう」
ということです。

耳を切り落としたことはどれにも書いてあるな。マルコにもルカにも。ところが、この
ルカ伝では、

「⁵⁰その中の一人、大祭司の僕を撃ちて、右の耳を切り落とせり。⁵¹イエス答
えて言いたもう『之にてゆるせ』而して僕の耳に手をつけて医し給う。」（ル



カ22・50(51)

と書いてある。落ちた耳が治つてしまつた。まあ、このキリストの靈の現実は、とても私たちに想像ができない。そんな凄い靈的な現実であることを、みんない加減な氣持で読んでいる。本当にこれは平伏して読まなければ読めないんです。

だから、いつも言つてはいるところ、このキリストの信という現実、事態は全く根源的なもの凄い靈的な現実であるということがわかる。いわゆる思い込みや信じ込みなんていうものではない。

「すべて剣をとる者は剣にて死^{つぶ}るなり」

と。これは千古の名言です。世界の歴史がこれを証明している。敵を切つたと思つたら、実はそれは自殺行為である。

「剣を抜く」

とは即ち要するに、殺人行為です。カインはアベルを殺しました。しかし、カインは、力インの末裔^{めご}というのは亡びた。

だから、我々の肉体をどうするこうするものはひとつも恐れるに足りない。魂をゲヘナにぶち込む方こそ恐いんだと。これは神さまの審判のことです。

それで、キリストは捕らわれながら、捕らえるやつに勝つわけです。まあ、これから読むところのキリストに対する侮辱^{うぶ}というものは、實に言語に絶したことをやつている。その後、宗教の世界でも異端者を拷問にかけたり、まあ大変ですよ。

●イエスの捕縛

¹²爰にかの兵隊・千卒長・ユダヤ人の下役ども、イエスを捕え、縛りて先ずアンナスの許に

これは退職した大祭司ですけれども、

¹³曳^ひき往^ゆく、¹³アンナスはその年の大祭司なるカヤパの舅^{じゅう}なり。

カヤパ¹⁴というのは25年から36年頃までこの大祭司であつたんですが。

¹⁴カヤパはさきにユダヤ人に、一人、民のために死ぬるは益なる事を勧めし者なり。

¹⁵シモン・ペテロ及び他の一人の弟子、イエスに従う。この弟子は大祭司に

アンナスに、

知られたる者なれば、イエスと共に大祭司の庭に入りしが、¹⁶ペテロは門の外に立てり。ここに大祭司に知られたる彼の弟子

ヨハネ（ヤコブ？）のことです。

いでて、門を守る女に物言いてペテロを連れ入れしに、¹⁷門を守る婢女^{はしめ}、ペ



テロに言う『なんじも彼の人の弟子の一人なるか』かれ言う『然らず』イエスを否んだわけですね。

¹⁸時寒くして僕・下役

みなこの大祭司の下役です。

ども炭火を熾し、その傍らに立ちて煖まり居りしに、ペテロも共に立ちて煖まりいたり。

¹⁹ここに大祭司、

アンナスが、

イエスにその弟子とその教につきて聞いたれば、²⁰イエス答え給う『われ公然に世に語れり、凡てのユダヤ人の相集う会堂と宮とにて常に教え、シナゴーグと神殿で語つて常に教えてきた。』

密には何をも語りし事なし。²¹何ゆえに我に問うか、我が語ることは聴きたる人々に聞え。視よ、彼らは我が言いしことを知るなり』²²斯く言い給うとき傍らに立つ下役の一人、手掌にてイエスを打ちて言う『かくも大祭司に答うるか』

なんていうお前の考え方か、けしからんというわけだな。いかにも下役らしい。

²³イエス答え給う『わが語りし言、もし悪しきば、その悪しき故を証せよ。善くば何とて打つぞ』

はつきりとキリストはその黑白善惡をしつかりと問うたわけです。

²⁴爰にアンナス、イエスを縛りたるままにて、大祭司カヤバの許に送れり。片一方はその政権だとか、教権だとか、そういうことによつてものを言つてゐる。マルチン・ルターの場合もそうでした。王権だとか、その教権において。ところが、ルターはただ一つ、神の言葉によつて立つていた。イエスがまさにこの神の言葉によつて、

「もし、間違つてゐるならば、言つたらよからう」と。

²⁵シモン・ペテロ立ちて煖まり居たるに、人々いう『なんじも彼が弟子の一人なるか』否みて言う『然らず』

二度目の否み。

²⁶大祭司の僕の一人にて、ペテロに耳を斬り落されし者の親族なるが言う『われ汝が園にて彼と偕なるを見しならずや』²⁷ペテロまた否む即ち、三度否みましたらば、

折しも鶏鳴きぬ。

これはみんな他の福音書にも書いてある。

「そうしたら、鶏が鳴くぞ」

とキリストが予言した通りになつてしまつた。まあ実に不思議なことです。イエスという



ひとはそんなところまで見通しがきいているひとです。

²⁸ 斯^{かく}て人々イエスをカヤバの許より官邸にひきゆく、時は夜明なり。彼ら過越^{すきこし}の食をなさんために、汚穢^{けがれ}を受けじとて己^{わたくし}らは官邸に入らず。

「過越」のこととは申命記16章にも書いてあります。

²⁹ 爰にピラト彼らの前に出でゆきて言う『この人に対して如何なる訴訟^{うつたえ}をなすか』³⁰ 答えて言う『もし惡をなしたる者ならずば汝に付さじ』

ちゃんとまあ理屈は通つてゐる。

³¹ ピラト言う『なんじら彼を引取り、おのが律法に循^{したが}いて審^{さば}け』ユダヤ人のう『我らに人を殺す權威なし』³² これイエス己^{わたくし}が如何なる死にて死ぬるかを示して言い給いし御言の成就せん為なり。

これは筆者の解釈の仕方ですが。死刑執行の権はユダヤ人はもちろん持つていないので、このローマ政府の方に移つてゐたわけですから。

³³ 爰にピラトまた官邸に入り、イエスを呼び出して言う『なんじはユダヤ人の王なるか』³⁴ イエス答え給う『これは汝おのれより言うか、將^{はた}わが事を人の汝に告げたるか』

どつちか、直接か間接かと。

³⁵ ピラト答う『我はユダヤ人ならんや、汝の国人・祭司長ら汝を我に付^{わたくし}したり、汝なにを為^なししそ』

それで私は聞くんだと。

● 我が国は此の世よりのものならず

³⁶ イエス答え給う『わが国はこの世のものならず、

「この世^もよりのもの」とギリシア語は書いてありますが。この世からのものではないと。若し我が国この世のものならば、我が僕ら我をユダヤ人に付さじと戦いしならん。然れど我が国は此の世よりのものならず』

こここのところは「此の世よりのもの」と書いてある。この句を私はつかまえて、いつか一文を書いたことがありますけれども。イエスの国はこの世から発したものではない。下からのものではなくて、上からのものである。

「もし、自分がこの世からのものであるならば、それは争つたろうが、実は争いにならないんだ。自分の国はこの地上の政治的な国ではない。自分の国はこの現実の世界を支配するところの、靈的な国である」と。「バシリイア」というのは、神の支配したもうところ。神の支配したもうところが自分の国である。いわゆる死後の「天国」とかいうのではない。

「神が支配したもうところの永遠の国。それは今、この罪の世を被つてゐるが、ま



たその中に浸透しているのだが、お前たちにはわからない。それが即ち、神の国であり、天国である」と。

「天国は、神の国は汝らの中にあり」

というのは、そういう意味における神の国です。

ちょうど、私たちがこうやつて立っているのは地面の上ですよね。この具体的な地面の上にいろいろ家を建てたり、歩いたりしている。これは即ち、地面からの在り方ですが。しようと天気予報でもつて風が動いているね。その風が動いているのを、天気予報が何のかんのと毎朝報せてくれるが、あのように明日のことがわからないような動き方をやつている。まあこの頃は明日くらいのことは分かるでしょうけれども。そのように、上からの靈的なものがしょっちゅう支配している。

ちょうど——今は譬えで言つていいだけのはなしですけれども——空気、風というようなものは見えない。雲は見えるけれども。空気や風は見えない。見えないものが、しかし、私たちのこの呼吸の世界を非常に支配し、そこに充満しているところの事態。けれども、私たちはその天気の中に歩くわけにはいかない。これは地面の上を歩いている。そういうように、ちょうど大気と土壤の関係みたいでありますけれども、しかし、そういう大気の中で空気を吸っている。もつてこの上に乗つかっていますけれども、とにかく肉体は重さでキリストは——この大気が今度は靈氣ですけれども——靈界からこの地上に現象してきた。即ち、

「言は肉となつた」

という。靈界から現象してきて、そして、我々と同じ現実の中にあるながら、実はこの靈界に属しているひとで、地に属している人ではない。靈に属しているひとである。

「靈によつて生まれる者は靈なり」

といつて、「地より生まれる者は地である」と。そういう、私たちが

「新たに生まれなければ」

というのは、このキリストと同じように、

「靈界のひとに、靈的空間の中に自分の本籍があるようなことにならなければ」

というのがこの「新たに生まれなければ」ということ。ところが、そういうひとが実は、

「柔和なる者、地を嗣がん」

というが、そういうひとが実は——「地から発した者」が地を継ぐかと思うと、どつこい——上からきたひとが本当の今度は地面の歩き方をするんです、これが。本当の実存はこつちからくる。こういうひとが本当の実存をするのに、地から生まれた者たちがこれを受けることができず、これに逆らうわけです。その絶対的な対立がここに非常に表れている。



●靈的世^{まつり}界秩序

この世の権威。実はパウロが言つてゐるところ、政治も神政であると。それはユダヤ人がそうなんです。神の意志を帶して王者は、メシヤは、神の意志を帶して常にその政治を行ふのが本当の政治の在り方。今の政治なんてはおよそもうそれとは似てもつかないところのものになつてしまつてゐる。ダンテが理想としたのがそれです。政教一致というのはそのことなんです。宗教と政治が本当に一つになる世界は全く理想の世界で、ダンテはその意味において王者とローマ法王というものをカトリックの中にいて考えていました。それを歌つてゐるわけですけれども。しかし、そういつたことは現実にはほとんど今は不可能なことになつてしまつてゐる。

それでも、とにかく、それが政治であろうと、経済であろうと、何であろうと、それが本当のものとなるためには、どうしても、「地から」というところから天的な質に変わつていかなくてはいかん。すべての営みはある一つの一点から来なくてはいかん。宗教がすぐ政治に関与するという——あの創価学会がどうかは知りませんが、とにかく——そういうことではないんです、今、私が言つてゐるのは。政治は政治、経済は経済のそれぞれの原理があります。ただそれを行う主体が何であるか。主体がこの地的な主体であつたら、これはいくらでも悪いことになる。ところが、主体が上だつたら、どんどん正しい方に向かつていく。

ヒルティが「倫理的世界秩序」という。しかし、その「倫理」というのは実は、「靈的」ということがその上にもう一つなければいかん。その靈的世^{まつり}界秩序は、聖靈による、神の靈によるところの——それは当然、道ですから——神の道を持つてゐる。「倫理」という言葉よりももう少し深いものを実は持つてゐる。そういう世界秩序を現じていこうとするためには——神の国を來らせようというのはただ祈りばかりではない——實際、現実に來らせようとする実存がなくてはいかん。その現実に來らせようとする実存の根拠は、どうしても、その人が靈を中心にしてゐることです。

これは教育だつてそうです。小学校から大学にいたるまで教育は今はダメだという。なぜ教育がダメか。それは教育者が本当にそういつた新しいこの靈を持つていなかつたらです。どんなに教育技術、教育制度がしかるべき改善されても——わるくはないですよ、大いに改善をやつてください——改善されても、それで事が根底的な改革には絶対にならない。むしろ、そのへんは現実はまだダメな面がありましても、本ものがくればそれを支配していくことができる。どう考へてもこれは真理なんですが、これがいくら言つたつてダメなんです。本当にその世界に自分が入つて、それを現じていく人が具体的に現れていくのでなければ。

そういうことで、ある意味において、これはシュバイツァーが『キリスト教と世界宗教』の中でも言つてますけれども。いくらそれを実現しようとしても、聖書は、それによつて地



上に天国が来るとは言つていない。人間のどんな努力も、それは結構なことなんだ。けれども、それによつて地上に天国は来ない。最後の神のもの凄い力によつて、それがいつぺんひつくり返されてからでなくては、新天新地は来ない。なんと人間というのは、根底的に失われた存在であるか。その点ではキリスト教もペスミステッシュである。**厭世的**、悲観的です。それは前進的に神の国は地上に来ないんだから。けれども、その悲観は单なる悲観に終わる悲観ではない。单なる厭世に終わる厭世ではない。

それにもかかわらず、どんなにそれが空しいことのように思われても、地上に天国を現じようとして努力精進してきた、それは祈りとして。あのところでシユバイツァーさんは「祈り」という言葉を使わなかつたのは、私は残念だと思う。それが本当の実存的な祈りです。その悲願が本願によつて受けとられるんです。悲願が何ものかをするのではない。悲願を本願が受けとつて、神さまが新天新地を歴史の終末にきたらせる。ここに我々の全生涯の御靈によるところの努力精進というものが全部、これは祈りである。

そして、

「祈りたることは聽かれる」

という。聽かれるということは、祈りが何ものかをするということではない。祈りたることというのは、祈りというのは、自分を全部そうやつて神さまに委ねることだからね。行為でも何でも全部、それは神さまに任せていることだから。そこを神がどのようになさるか、それは神さまの方のはなしです。そこに現実がどのように惨憺たるものであつても、こと志といかに反しても、なおかつ必ず来るという確信、神の国は来るという確信がある。それは神の本願に全托するからである。

● 灵界の王者

そこで、キリストがどんなにここでもつてみんなに捕らえられて殺されようとも、神さまの道はちゃんとこれによつて成就していく。だから、

「お前、そんな、剣で争つたつて何もならん。そんなことしたら、同じ現実の中に入つたら、かえつて亡びてしまふぞ」と。

³⁷爰にピラト言う『されば汝は王なるか』

「王か」と。この「王」というのはすぐ地上の王と思うわけでしょう。

イエス答え給う『われの王たることは汝の言えることし。

「王は王だ」と。けれども、同じ「王」という言葉を使つても、内容は全然ちがう。「メシヤ」と言つたつて、地上に世界支配のイスラエル王国をつくるなんていうことではない。ユダヤ人は相変わらずそんなことを夢見てゐるんだけれども。

我は之がために生まれ、之がために世に来れり、



「私は本当に王者となるために生まれて、それで世にやつて来た」

と。彼は実は僕となつて動いていた。エホバの僕、ヤーヴエの僕、神の意志を行ずる者として動いていた。そして、人のどん底に立つた。ペテロの足を洗つて、

「私がお前の足を洗わなかつたら、何の関わりがあるか」

と言つて、私たちの罪のどん底に立つて、ついに最後には罪の極刑の象徴である十字架にかかるつてしまつて、キリストは最極悪人です。最極悪人に自分がなつて、最大の悪人になつた。罪びとの首に彼はなつた。それは本当の王者とならんがためであつた。これはピリピ書にも書いてあるとおりです。ピリピ書2章5節から、

「⁵汝らキリスト・イエスの心を心とせよ。⁶即ち彼は神のかたちにて居給いしが、神と等しくある事を固く保たんと思わず、⁷反つて己を空しうし僕の貌かたちをとりて人の如くなれり。⁸既に人の状にて現れ、己を卑ひくうして死に至るまで、十字架の死に至るまで順したがい給えり。⁹この故に神は彼を高く上げて、之に諸般もろもろの名にまさる名を賜いたり。¹⁰これ天に在るもの、地にあるもの、地の下にあるもの、悉じよとくイエスの名によりて膝を屈め、¹¹且もろもろの舌の『イエス・キリストは主なり』と言いあらわして、栄光を父なる神に帰せん為なり。」（ピリピ2・5～11）

この「主なり」は、「王なり」でも同じことです。「ザ キング オブ キングズ」だね。有名なヘンデルの「メサイヤ」に出てくるあそこだよ。今、靈界の王者としてキリストは君臨している。

● 真理とは何ぞや

即ち真理につきて証せん為なり。凡て真理に属する者は我が声をきく』³⁸ビラト言う『真理とは何ぞ』

今日の題はこの「真理とは何ぞや」です。「ティ エステイン アレーティヤ」という。私が育つた無教会はこの「真理」という言葉が好きなんだ。藤井先生もこの「真理」というのが好きだつたね、義だと愛だとかいう言葉よりも。先生はあまり「愛」ということは言わなかつた。むしろ、「義」の方だ。それから「真理」。

「信仰によつて義とされる」

と。それは内村先生からきている。無教会の妙なあれが出てしまつた。その無教会が「真理」と言つてゐる、それはわるくはないですけれども、どこか、やはり觀念なんだ。私たちはこの「真理」という言葉を聞くと、私たちもうつかりすると觀念なんですね。

ところが、一番「真理」という言葉を使いそうもないヨハネが「真理」という言葉を一番使つてゐる。これに驚くんです。パウロさんもそれは使つてゐるけれども、分量の比率からいふと、ヨハネの方がが多い。なにも多い少ないで判断するわけではありませんけれども、それを思



いましても、このキリストが「真理」と——ヨハネは何といったってキリストのじかじかだからね——はつきりと出ているのはあのヨハネ伝14章でしょ。

「我は道なり、真理なり、生命なり」

と。ギリシア語で「アレーティヤ」という。ヘブライ語でいうと「エメツ」。「アーメン」という字からくる。

「私は道であり、真理であり、生命である」

と。ヨハネ伝の一番先に、1章14節、

「¹⁴言は肉体となりて我らの中に宿りたまえり、我らその榮光を見たり、實に父の獨子の榮光にして恩恵と真理^{めぐみ}と眞理^{まこと}にて満たり。」(ヨハネ1・14)

と。「恩恵」という言葉と「眞理」という言葉がよく対に出ている。もう旧約からして実はそうなんです、「恩恵と眞理」という言い方がね。預言者の中に出でくる。

「律法はモーセにおいて与えられ、恩恵と眞理とはイエス・キリストによつてやつて來た」

と。この「眞理」という言葉は、「まこと」と日本語で言いますが、客観的な何ものかと、主観的なまことと、どつちも含んでいるんですよ、この「眞理」という言葉は。これは主客未分の世界なんです。いわゆる客観的に

「眞理とは何ぞや」

と言つたつて、これは決してつかめない。主客未分の世界。あるいは、主客一如の世界。「ヴァールハイト」と「ヴァールハフテッヒカイト」が、「眞理」と「眞実」が一つの世界が——もし概念的に少し説明するならば——この「アレーティヤ」という字の意なんです。それが証拠には、「アレートース」という形容詞が「まことの、眞理の」という。それから、「まことに」という「アレートース」という副詞が全くそういういた主の方、主観的、ズブエクテープな、「まことに知る」だとか、「まことに認める」とか、

「まことに前は私の弟子だ」

とか、みんなそういうときに、同じ言葉から派生しているところの表現ができている。「眞理」という字は即ち、主客未分、主客一如であると、まずそのことをはつきりと思つていただきかないといけない。

それで今度は、そうすると、それは何か対象的にもはや——対象的につかむ世界は客ですからね——そうかといって、いわゆる主観的なものでもない。むしろ、これは主体的といふ。主体、客体、一如、未分というわけだ。主体というからは、何かこれはサブスタンシャルなもので観念ではない。実体的なものです。即ち、眞理は実体的な何ものかであつて、単に対象的に認識する世界ではない。

そうすると、神さまは、私たちには対象的に認識できない。対象的に、

「神はどうである、こうである」



といふら言つてみたつて、これはしようがない。全然解らないです、神は。「お父さん」みたいなものを想像したつてダメです。キリストがいくら「父よ」と言つたつてね、それはお伽話になつてしまふ、そんなことしたら。キリストが

「父よ」

と言ふときに、自分は「子」である。これは離すことができない。父と子は、なるほど対立的であるけれども。「父よ」と呼ぶときに、自分の「子」ということが本当に一体として自覚されている世界なんです。父子一体というような具合にね。父子一如と。そういうような自覚のもとに、あるいはそういうような現実のもとに、「父よ」と呼ぶ。これが本当の呼び方なんです。

傍観的に、第三者的に、対象的に「父よ」と呼んだつてダメなんです。「父よ」と呼ぶときには、もう完全に委ねられた角度から「父よ」と、信頼している。全く信頼している。「父よ」と呼ぶときに、信頼しているから、それはこの中に入つてしまふ。その「父よ」と呼ばれたいわゆる外側の客体的なものが実は、この父が子を呼んでいるそのもの凄い主体であるということが迫つてきている、呼ぶと同時にその現実が迫つてくるような事態。それを主客未分という。一如という。そういうふたつ、「父よ」です。

●私は真理なり

この頃、結婚した人がある。そうすると、奥さんを何と呼んでいるかは知らないけれども。これを呼んでいるときには、もう未分の世界。それから奥さんもそうだろう。そういう、神とイスラエルの関係が夫と妻だと言つた。もし恋人の関係がそこまでいけば、もの凄い関係です。そういうふたつどころに、「ヴァールハイト」という、聖書が言うところの「真理」の場があるんです。

「真理とは何ぞや」

なんて、偉そうに問つたつてダメですよ。

「真理は何だか知らないけれども、私は真理というものの前に降参する」と言つてかかる。「ごらんなさい。そうしたら、「真理とは何ぞや」ということがだんだん開示してくるから。「解ろう」「エアケンネン」しようとしたつてダメですよ、この「ヴァールハイト」というのは。認識しようとしたつてダメです。

「真理はわからん。わからんが、とにかく真理というやつを受けとりたいな」というのがこの「グラウベン」（信）です。認識されるべき真理ではなくして、信じられるべきものが真理という。真理は信の対象である。信の対象とならないものは、今この聖書でキリストが言つているところの真理ではない。信の対象となるもの——その「なるもの」と言つたつて、これは物ではないから——これは「ペルゾーン」、活ける実体なんです。活ける現実、根源現実。これは、



「**我は真理なり**」

とキリストが言われた。これが一番はつきりしている。

「**私がその真理である**」

と。これは概念規定ができない。

「**真理とは何ぞや。**第一はこうである。第二はこうである。まず愛である」なんて言つたつてダメだよ。概念規定はできないが、その中にはもう一切のものを持つているところの、完全性を持つていてるところの、何ものかなんだ、この真理というのは。私たちは一生かかっても、

「**真理は何々である**」

と説明することはできない。また、説明するというような角度がそもそも間違いである。そこが仏教的な言葉を使うと、絶言絶慮の悟入の世界と言つてもわるくはない。悟り入るような。しかし、それは「悟り入る」といつても、ただ冥想で悟り入るような仏教的なとはちがう。仏教的なのは冥想的です。それに対して、福音の真理は行動的です。だから、実存的なんです。生きてみて本当に然かとつかむ世界。生きてみてね。だから、

「**我は生命なり**」

と言う。

「**我は道なり、真理なり、生命なり**」

と。それはどこに通じているのか。神さまと通じている道である。宗教は「再結」と言います。結びつく、その道。そういういた道であると同時に、また生命であり、また真理である。

「**真理とは何ぞや**」

なんて言つたつて、これはもう絶対にキリストは答えやしない。もし答えるなら、何とキリストは答えるか。

「**我を視よ。我はそれなり**」

と。キリストは、「我はそれなり」と一番先に読みましたが、「真理とは何ぞや」と言われたときに、キリストがもしここで「我はそれなり」と答えたら、それでお終いなんです、問答は。問答はあとは無用です。惜しいね、こここのところで、「我はそれなり」と書いてないけれども。ここはそう読まなくては。「真理とは何ぞや」と。キリストは

「**我はそれなり**」

と言われた。

「**我を視よ。何を今ごろぬかすか**」

とまあ言つわけですよ。そういうこの気合。だから、私は言つていてるでしょ。

「福音書にきて、キリストの前に本当に降参するまではこの世界に入れませんよ」と。降参したら、「真理とは何ぞや」ということが、もはやどんな神学書もとも及ばない内容をグッとつかんでしまう。何と真理とは無量なもの、量りしれないものであるか。真



理は無量なるものなりと。そういう答えしかないです。

しかしながら、それでは、真理を体得し、そうだと言わしめるところの実体は、主客未分という、主客一如というところの——今度はいいですか、本来、真理はそういった主体ですから、客体でなくて主体的な方面が——そして、自分がその真理というものの客体となつた、今度は主客未分というところにならなければならないわけです。それで、その客体たるところのものと、主体たるもののが未分一如とはどのようにして可能であるか。それは聖靈の他にない。聖靈を受けるまでは、この真理の主体であるところのキリスト、真理そのものであるところのキリストの、真理たるゆえんがわからない。そのことはここには書いてありません。書いてありませんけれども、まさにそういうわけです。

●真理の証人

そこでひとつちよつと方向を変えて、皆さんと一緒にヨハネの書簡を見たい。そこへくるともう少しつきりしたことが出てくるだろうと思います。有名な例の言葉、

「¹太初より有りし所のもの、我らが聞きしところ、目にて見し所、つらつら見て手触りし所のもの、即ち生命の言につきて、²——この生命すでに顕れ、われら之を見て^{あかし}証をなし、そのかつて父と供に在して今われらに顕れ給える永遠の生命を汝らに告ぐ」（ヨハネ一1・1～2）

こういう言い方は聖靈がなかつたら読めないんです、いくら解釈しようとしたって。

このヨハネ書簡というのは全くヨハネ伝と同じです。「生命の言」、「永遠の生命」。3章13

節に、

「¹³兄弟よ、世は汝らを憎むとも怪しむな。¹⁴われら兄弟を愛するによりて、死より生命に移りしを知る、愛せぬ者は死のうちに居る。¹⁵おおよそ兄弟を憎む者は即ち人を殺す者なり、凡そ人を殺す者の、その内に永遠の生命なきを汝らは知る。¹⁶主は我らの為に生命を捨てたまえり、之によりて愛ということを知りたり、」（ヨハネ一3・13～16）

中心に「愛」というものがありまして、それによつて

とか何とかいろいろなことを言つてゐる。

「行為と^{おこない}真理をもつて」

ということは、行為的な真理ということ。何か二つのものと思つてはいかんですよ、こういう聖書の言葉は。行為的な真実をもつて、行為的な真理をもつてと。即ち、真理は行為的なもの。

「行為はどんな行為でしようか。真理はどんなものでしようか」

なんて、そんなことを解釈したつて、この聖書の言葉というものは解るものではない。こ



ういう対句的な言い方は実は、それは離すことのできないものなんです、「行為と真理」とか「恩恵と真理」とか、ああいう言い方をするのは。そこをグッと、真理が即ち行為的なものであって、その行為は何かというと、さつきから言っているところの愛なんだ。だから、「愛」「アガペー」とか「恩恵」「カリス」とかいうようなものが「真理」「アレーテイヤ」の根源性格である。そして、

「愛は行為の、徳の全きなり」

と、パウロも言つているとおり。即ち、一切の行為中の行為、また行為中の冠するところのもの、それをまた帶するところのもの、これを全うするところのもの——まあ、いろいろな表現をしているよね——それは「愛」「アガペー」である。その極致は、キリストが十字架の上から顕した。

福音の真理という、キリストの真理は、認識された冷たいものでは絶対にありません。いわゆる理性的に、「これは正しい」とか「正しくない」とか言つてはいる世界ではない。キリストの真理というものはもの凄い生命的なものであり、その生命の中心は、実質は、本質は愛である。

愛は人を活かす。イデオロギーは人を殺す。単なる理念的なものは冷たい。けれども、愛は人を活かす。これはもうひとつ深く言うと、人を救うということです。救うことと活かすこととは同じことです。愛だけが、このキリストに顕れている愛だけが、人を救う。だから、キリストの真理は救済的な愛を中心としたものである。その救済的な愛の力の力たるものは何か。それは聖霊である。聖霊はもの凄い愛を持つた靈ですから。罪を贖う。それは義が貫いているんだから、この愛の中には。

申し上げているとおり、神さまの意志を行ずる事態を義と言います。神の意志を行ずる事態が——人間の観念的な

「正しい、正しくない」

なんていうよりもっと次元の高い世界です——そういう義が貫いているから、その罪を全部救い贖いとつて、救い活かすところのもの。その実体は神の靈、神靈である、聖霊である。その聖靈を本当に受けとつた実体がキリストである。それが即ち真理の権化である。その真理の権化を自分が認識するのではなくて、その中に自分を投入するということが「信ずる」ということである。しかば、主体であるキリストと、客体である我とは主客一如の世界になり、未分の世界に入っている。そのとき初めて真理というものが我がうちに体感されて、

「私は真理の証人である」^{あかしひど}

ということが言えるわけです。もう概念分析とはおよそ違う世界です。証人であればあるほどよいよ平伏しであるだけのはなしです。これがいわゆる新興宗教の教祖的なものとはおよそ違う。こちらは真理無き者です。



●虚偽の靈

それで、ヨハネは真理の反対に何という言葉を使っているかといふと、「偽り」という言葉を使っている。「うそ」。「うそとまこと」なんて言うね。虚偽。虚偽の靈はサタンです。

そして、虚偽の靈はサタンで、これは罪を行う。3章8節、
「⁸罪を行うものは悪魔より出づ、悪魔は初より罪を犯せばなり。神の子の現
れ給いしは、悪魔の業を毀こぼたん為なり。⁹凡て神より生るる者は罪を行わず、
神の種

聖靈のことですよ、これは。神の「スペルマ」。

その裏に止まるに由る。彼は神より生るる故に罪を犯すこと能はず。これに
よりて悪魔のことは明かなり」（ヨハネ一3・8～9）

4章6節のところに、「迷いの靈」という言葉が出ている。

「⁶我らは神より出でし者なり。神を知る者は我らに聴き、神より出でぬ者は
我らに聴かず。

これははつきりしているね。地からではなくて、天から生まれてきた。

之によりて真理の靈と迷謬の靈とを知る。」（ヨハネ一4・6）

2章21節に、「虚偽」という言葉が出ている。

「²¹我この書を汝らに贈るは、汝ら真理を知らぬ故にあらず、真理を知り、か
つ凡ての虚偽の真理より出でぬことを知るに因る。²²偽者いつわるものは誰なるか、イエ
スのキリストなるを否む者にあらずや。御父と御子とを否む者は非キリスト
なり。」（ヨハネ一2・21～22）

「偽者いつわるもの」というものはキリスト受けとらないものである。だから、その区別でもうはつきり
する。ヨハネ伝の8章にも、

「サタンは虚偽の父であり、殺人のもとである」
なんていう言葉がある。

「⁴⁴汝らは己まことにが父、悪魔より出でて己まことにが父の慾を行わんことを望む。彼は最初
より人殺しなり、また真まことにの中になき故に真に立たず、彼は虚偽いつわをかたる毎
に己まことにより語る、それは虚偽者にして虚偽の父なればなり。」（ヨハネ8・44）

福音そのものが今度は、真理であるわけです。だから、私たちはもはや「真理」という
言葉を、「キリスト」とか「福音」という言葉と分けて考えてはいかん。喜びの音信。だから、
非常にこの「真理」という言葉が、「愛」だとか「喜び」だとか「生命」だとか「光」だとか、
もうそういうものと離すことのできない内容を持つた実体であるということ。観念を思つ
てはいかん。「真理」という言葉を聞くと、普通の哲学的な思索の方からいうと、あるいは
自然科学的な方からいうと、それは「認識の真理」です。認識の真理ももちろんありますよ。
認識の真理は真理ではなくして、信仰の角度の真理です。パウロがコリント前書13章でも



言つてゐるでしょ、

「真理の喜ぶところを喜ぶ」

と。真理を擬人化して、活けるものの如く。パウロは言つてゐる。

「⁴愛は寛容にして慈悲あり。愛は妬まず、愛は誇らず、驕らず、⁵非礼を行わず、己の利を求めず、憤らざる、人の惡を念わず、⁶不義を喜ばずして、真理の喜ぶところを喜び、」（コリント前13・4～6）

6節は、「真理と喜びを共にする」と言つてもいい。ヨハネの手紙三の4節にも書いてある。

「⁴我には我が子供の、真理に循いて歩むことを聞くより大なる喜悦はなし。」

（ヨハネ3・4）

「真理に循^{したが}いて歩む」は

「真理にあつて歩む」

です。この「子供」というのは自分の信者たち。みんなが本当にキリストにあつて――「真理にあつて」は

「キリストにあつて」

と読み替えればいい——歩む。キリスト中心、キリスト論的に——なにも神学的に私は言うわけではありませんけれども——結局、キリスト中心でなかつたならば、キリスト主体でなかつたならば、この聖書の言葉は本当につかめないということがここでもはつきりするわけです。だから、

「真理とは何ぞや」

「私はそれなり」

ということを、さつきのところのあとに我々は直ちに読むべきである。

●聖靈の現象体

私たち自身が手放しで、

「私は真理なり」

とは言えません。そんなことをすると、とんでもないことになる。けれども、さつきから申し上げているとおり、「私はそれなり」ということはキリストの現象体、聖靈の現象体である。

「聖靈わがうちにあり、キリストわがうちにあり」とパウロが言つたでしょ。

「われもはや生くるにあらず、キリストわがうちにあり」と。即ち、

「真理そのものが私の中にあるぞ」と。これは普通の常識では言えない。これは私たちにとつては次元の違つた真理が入つて、



恵みとなつて入つてゐるから、恩恵たるところの真理が私のうちにある。その意味において、何も人に言う必要はないけれども、

「我を視よ」

とペテロが言つたその「我を視よ」が言えるわけなんです。また、

「我はそれなり

ということだが、その言葉の最も深い意味において、言えるわけです。それが証人である、もうこの真理を身に体したら。

まあたくさん、今の青年たちがいろんな本を読んだり、暗中模索してさ、小学校から大学まで行つて結局、何も本当のものはつかめないで、社会に行つてそれでとにかく何かおざなりな生活になつておしまい。それでは本当に情けないはなしです。ところが、我々は無量なるものをうちに宿してしまつたんだ、無量なる真理を。それはこの聖靈の事態ですから。今度は聖靈が私たちにとつて真理の実体ですから。御靈の主が、主なる御靈が。だから、何を読んでもちゃんと読めてくる。受けとれてくる。楽しくなつてくる。すべてを包摶するようになつてくる。

私も昨日、キリスト教研究会の連中にそういう角度から話しているうちに楽しくなつてしまつた。みんな聞いているうちに何となく楽しくなつた。とにかく今までとは違うなということを正直、感ずる。

「文殊が語つていたら、聞ける者が悉く文殊となれり」

と書いてあるが、そういう角度のことが我々のあたりに現じているということは、お互いに聞くも語るも同じこのキリストの靈の中に入つてくるというと、

「何だかしらんけれどこれはどうも」ということになるわけでしょ。

そこで、私たちはもはや、「真理は何ぞや」なんていう馬鹿げた問はもう要らなくなつて、非常に真理という言葉が今度は慕わしくなつてくる。真理とすることが慕わしい響きを持つてこなければ、うそですよ。ああ慕わしきかな、この福音の真理はと。一般に「真理、真理」といろんなことを言つて説明していたことに対しても、

「そんなことではないよ」と。「それではどうなんだい」と。

「わからんよ。説明はいらん。キリストを視よ。また、この私を見たらば、何かしらんが、その呼吸が見えないかね」

ということになつてください。人に、

「真理は何と慕わしいかな」

ということになつてください。

